

インターネットと文学

ードイツ語で書かれた俳句ー

高橋信之

私の文学研究の方法は、文学と語学、あるいはドイツ文学と日本文学といった截然と区分した上でのドイツ文学研究の方法ではなく、ときには比較文学的研究の方法を取り入れることもあれば、インターネットを通して文学を見ることもある。これは、できるだけ広い視野で文学を読み、研究したいという、ただそれだけの、文学を見る一つの見方にほかならない。

日本独文学会にもインターネット上のホームページ①があるが、そこには、独語独文学関係の国内外の情報源・独文学会員の個人ホームページ等への充実したリンクが提供されている。個人ホームページの中では立命館大学の岩居弘樹氏のが特に充実しており、分かり易く平明なのがよい。

そこに書き込まれているドイツ語教育に関する論文を紹介する。

最近ドイツ語教育の世界でも、コンピュータへの関心が高まりつつあります。コンピュータ本体の価格の低下もさることながら、Internetの爆発的な普及が原因になっていることは明らかです。

さて当たり前の話なのですが、コンピュータにはソフトが必要です。ドイツ語教育でコンピュータを使うと言っても、ドイツ語教育に使うことができるソフトがないと話になりません。

LL教室は、使えるソフトが無かった、ソフトの自主開発ができなかった、あるいは困難であったということが失敗の原因だったと言えます。

語学のためのコンピュータ教室は、今LL教室と同じ運命をたどりつつあるような気がします。ただ、大きなすくい手はInternetの存在でしょう。LL教室は高価なテープ・ダビング機としてしか機能しませんが、コンピュータ教室はInternetに接続されていれば、コミュニケーションツール、情報収集のためのツールとしては生き残っていきます。②

ドイツ語教育を含めて、日本におけるドイツ語とドイツ文化の情報収集のために、インターネットの果たす役割は大きくなったと言って良いであろう。「ドイツ語で書かれた俳句」を文学作品の一例として取り上げ、ドイツの俳句の傾

向を知るには、それが掲載されているホームページの一つであるドイツ俳句協会のホームページ③を、先ずは訪ねることである。そこに書き込まれているドイツ語俳句の例として、

Die Spatzen hupfen
auf der Mittagsglut um den
eigenen Schatten /Magdalena Obergfell

雀跳ねるきらきら自分の影を（高橋信之訳）

を挙げよう。

Nacht stroemt ueberall
in den reifenden Kirschen
steht eine Leiter. /Mario Fitterer

夜の梯子立てかけられ桜桃の熟れ（高橋信之訳）

フライブルクのマリオ・フィテラーは、名の知られたドイツ語俳句作家で、習熟した句を世に出している。

Auf dem weissen Blatt
- verschmiert - der Motte Leben
ein Silberstreifen /Margaret Buerschaper

白い紙に散らされ蛾の命は銀の筋（高橋信之訳）

この句は、1990年のフランクフルト日独俳句大会 (Haiku-Treffen) ④で推賞されたもので、作者がドイツ俳句協会会長なので、ドイツ語の俳句の一つの水準を示しているものと判断して差し支えない。

俳句形式としての5-7-5音節三行をうまく纏めている句である。ドイツの俳句のほとんどがこの5-7-5-Formをかたく守っており、アメリカの英語ハイクが形式を崩しているので、ひどく対照的である。この問題は、主に英語とドイツ語という言語の違いから起こってきたものと思われる。

季語・季題は、ドイツに歳時記がないこともあって、俳句実作や作品解釈では主要な課題になっていない。それに代わるものとして自然の事物や風景との関わり方に高い関心を示している。ブアシャーパーの句の<Motte>は、蛾という意味だが、季語・季題としての働きをしているわけではなく、<蛾>という

自然と作者との関わり方にこの句の主題がある。

日本語の俳句では、5－7－5の17字音と季語が俳句の約束事となっているが、ドイツ語や英語の俳句では、ひどく曖昧で、「短い」と「自然」と関わりのあることが俳句の説明として一般的である。

漱石研究家で、ドイツ語俳句の作家でもあるカールハインツ・ワルツォックは、そこを深く捉え、俳句を、精神的態度 (geistige Haltung) として見ている。

In ein Buch bin ich vertieft,
von den Augen schwebt mir der dichte
Nebel meines Heimatlandes. /Karlheinz Walzock

書に耽り故国の霧の濃さ浮かぶ

この句は、俳誌「いたどり」に発表されたものであるが、選者の川本臥風は、次のような評を述べる。

ワルツォックさんには余り接触もせず、句の方の事も知らなかったのですが、今度の投句にはびっくりしてしまいました。この人は、愛大の独逸語の先生なのですが、こんなにも日本語に、とりわけむつかしい俳句に入って行った事は実に驚嘆すべき事です。⑤

ワルツォックの俳句は、誰かに教えられたものではなく、自分ひとりで覚えたものであって、その秘密を明かしてくれるのに、漱石について書かれたドイツ文の博士論文がある。いわゆる子規の写生論によって指導された虚子等の文章家グループと漱石との関係を論じたもので、近代日本文学を代表する作家漱石が生まれるに至った土壌を解明しているのである。そのなかで特に私の興味を引いたのは、第三章の「写生文の、禅仏教と俳句詩と自然主義との関係」である。この章では、「草枕」と、虚子の短編小説集「鶏頭」のために書かれた序文が重要な役割を荷ない、ワルツォックの俳句観をつくりあげているものと思われる。漱石をめぐる禅と俳句と写生文との関わりが、彼自身の俳句観をつくりあげているのである。漱石の「余裕」とか「非人情」とか「則天去私」とかいった精神的態度は、禅からきており、それが行動に移され現実化されると、俳句とか写生文とかになると言っている。K. Walzockの俳句観は、漱石研究によって正当なものとなり、その俳句観に裏打ちされている俳句の実作は、並の日本人をしのぐものとなったのである。

Ins goldne Kornfeld
frisst sich die Maehmaschine
Streifen um Streifen./Annelore Stamm

熟れ麦の刈り機の食める筋また筋（高橋信之訳）

この句は、「インターネット俳句センター」⑥のウェブ・サイトで紹介されたもので、フランクフルトの俳句指導者であるワルツォックは、「最も良い」句として推奨した。

「湖に映る月といったようなありきたりの <abgedroschen>な表現ではなく、新しい見方<neues sehen>」で、刈取り機<Maehmaschine>、刈取った後の筋<Streifen um Streifen>といった情景がありありと目に浮かんできて、晩夏の雰囲気<Spaetsommeratmosphäre>、収穫の季節の美しい雰囲気のあるハイクだといって高く評価したのである。この句の良さは、何ととっても、季節感あふれる風景が鮮明に生き生きと表現されているところにある。この句の構成、その言語の構造について私なりに少しの説明を与えると、句の冒頭に置かれた前置詞と冠詞の <Ins>は、風景の位置、その空間をまず明確に設定し、揺るぎのないものにし、Akkusativの <s>は、この風景にうまく「動き」を入れている。名詞の<goldne Kornfeld>「熟れ麦」の前に<Ins>が置かれている第一行は、私の日本語訳では、「熟れ麦を」となり、<Ins>の意味の「を」が名詞の「熟れ麦」の後にくて、ドイツ語の原句とは、その位置関係が逆になった。前置詞と冠詞を名詞の前に置くというドイツ語の文法をうまく生かしているので、表現された風景が実に鮮明である。「熟れ麦を」という私のありきたりの<abgedroschen>な日本語訳と比べると原句のが「的を得た」<treffsicher>なものであることに気付いていただけたらと思う。第一行の母音<o>と第二行、第三行の子音<s>との音の対比も実に効果的で、ハイクの中の風景を鮮明にしている。第一行の母音 <o>は、明るく広々とした、それでいて落ち着きのある風景を表現し、そこへ刈取り機が第二行の子音 <s>でもって切り込んできている。第三行の<Streifen um Streifen>のリズムは、取り入れの快い心の弾みを表現している。第二行と第三行との間の切れも、ハイク的で、その切れでもって、「筋また筋」といった取り入れの風景をうまく浮き上がらせ、一句が収まっている。完成度の高いドイツ語の俳句がドイツの風土から生まれたのである。

この句についての勝れた言語分析（語学的解釈）に宮坂豊夫氏（関西大学）の論文（水煙第114号および愛媛ドイツ文学9号）⑦がある。この論文は、現今のドイツ語統語論の出発点に位置するE・ドラッハの理論を援用して解説する。主語(Maehmaschine)と(Ins)に導かれた副詞句との語順転換による句の「動

き」である。表層の語順の背後に、無標から有標への語順転換に伴う有意味性を読み取るのである。更に、関口存男の「搬動語法」によって、この作品の語学的な最大の眼目である fressen（食らう）のからくりを明らかにする。語順転換による言葉の働きとも絡んで、句の表現する生き生きとした「動き」を解明する。三つ目には、ヤコブソンの「等価性の原理」を援用して解説、その他にも隠喩語法や擬音語の働きについての解説もある。言語学を駆使した、こうした解釈は、日本語の俳句では見られない。単なる意味の解釈に留まってしまうのである。日本で生まれた俳句がドイツ語で書かれると、曖昧なところがはっきりとして、学問の明るみに出るのである。ここが日本語の俳句とドイツ語の俳句との大きな違いであろうと思う。

インターネット上の WWW に書かれた多様なドイツ語俳句の他の例⑧としては、

Heut war Muttertag
Ah, der Fliederduft unter
warmerem Mondlicht /Horst Ludwig

母の日のリラ匂う月光温かい

Gestutzte Baeume
gestikulieren reglos
ins Blaue hinein. /Helmut Schulze

刈り込まれし形のままで青空へ

Im Puppenwagen
glaenzen zwei Kastanien -
das Maedchen strahlt /Rudolf Thiem

カスターニエ二つ輝く乳母車

等があって、盛んである。第一句「母の日」の作者、ホルスト・ルードヴィヒは、アメリカのミネソタの大学助教授で、“Deutsche Haiku-Zeitschrift”（ドイツ俳誌）⑨というドイツ語俳句のホームページを持っている。第二句「青空へ」の作者は、ローマ在住のドイツ人であり、第三句「カスターニエ」は、ハイデルベルクからのものである。

日本の俳句は、日本文学の歴史的経過の中で、長歌から短歌へ、短歌から俳句へと発展してきた。その歴史は浅い。「俳句」という言葉を使うようになった

のも、明治の正岡子規(1867-1902)以来であり、松尾芭蕉(1644-1694)が俳諧の文学を確立したのも、十七世紀後半のことなのである。

閑さや岩にしみいる蟬の声 松尾芭蕉

Stille- der Zikadenlaerm
drinkt
ein in die Felsen. /Matsuo Basho (ヲbers.: Dietrich Krusche)

芭蕉が俳諧で得たのは、俗を離れた静寂の境地であり、これほど物の本源深くを詠んだ句は芭蕉以前にも以後にもない。

をとゝひの糸瓜の水も取らざりき 正岡子規

Vorgestern habe ich
das Schwammkuerbis-Wasser
nehmen doch koennen. /Masaoka Shiki (Uebers.: Nobuyuki Takahashi)

子規絶筆三句の中の一節である。他の二句は<糸瓜咲て痰のつまりし仏かな>と<痰一斗糸瓜の水も間に合はず>であり、子規の生涯を思い、心うたれる。芭蕉最後の吟として有名なく旅に病で夢は枯野をかけ回る>は、旅をすみかとした詩人の生涯の象徴として意味を持つが、それと同じと見てよい。現代俳人としての川本臥風(1899-1982)と西垣脩(1919-1978)を取り上げる。臥風と脩は、旧制松山高校(俳句雑誌星丘)での師弟である。⑩

蝶飛びむかしの時間かも知れず 川本臥風

物の本源を深く静かに見つめている作者の視線が感じられる句である。

Ein Schmetterling fliegt --
so ist es mir, ob wohl
in der alten Zeit. /Kawamoto Gafu (Uebers.: Nobuyuki Takahashi)

生牡蠣の胸を落ちゆくさみしさ堪ふ 西垣 脩

In meiner Brust fallen
rohe Austern herab -- ich halte
die Einsamkeit doch aus. /Nishigaki Shu (Uebers.: Nobuyuki Takahashi)

生命に対する静かないとおしみを感じさせる詩人の句である。
芭蕉が俳諧の文学として確立し、現代に引き継がれてきた俳句は、個人の生の問題が問われており、何よりも人間らしいところに存在意義がある。川本臥風の「人間性に対する信頼感」もこういった奥深いところからくるものである。西垣脩は、臥風第一句集『樹心』に寄せる文で、「主体性」の問題に深く関わってこう語る。詩や芸術で重んじられる独創性は、俳句では「主体性」ということになる。

どんな意味でも先生の作品には野心的な味がまるでない。しかし先生の世界からまさに流露しているという意味で、独自のかけがえのない芸術的香気が歴然とある。それが、今日ではむしろ僕たちを元気づけてくれる。自分の生の問題と結びつけて所謂主体的に句作するところに現代俳句の特徴があるのだそうだからである。

臥風作品は何物にも障げられずに流露してゆく。作者の願望も実はそこに在るのであった。問題は、そういう流露感が僕たちに与える、俳句に対する信頼感むしろ人間性に対する信頼感なのである。⑩

俳句文学の歴史的経過の中で、芭蕉は、第一の発展段階であったが、今、二十一世紀を迎えようとする時代の俳句は、第二の発展段階に入ったと見てよい。多様化の時代である。芭蕉の深みの世界に、明るい広がりを持たせるのである。多様性の問題は、人間の文化の問題でもあり、多様性を認めないところには人間の文化がない。日本の俳句がドイツ語で書かれることによって、明らかに変容する。すでに指摘したように、分析的な語学的解釈によって学問の明るみに出てきた。これも多様性へ向けての発展なのである。俳句が日本語だけに留まらずに、多様な外国語で書かれるということ、また、海外の様々な地域で日本語の俳句が作られるということは、俳句の多様性へ向けての新しい発展なのである。インターネット上の俳句も、コンピュータ言語の試練を経て多様性へ向かっている。マルチメディアの俳句である。

季語・季節感での多様性を明らかにするために、次の例句⑪を取り上げる。ドイツの自然と風土の中から生まれた日本語の俳句である。

カスターニエの青き実曇天よりもげば (ベルリン)

高橋正子

Vom wolkigen Himmel
abgeplueckt -- die gruene Nuss
der Kastanie (Berlin) /Masako Takahashi

「カスターニエ」は俳句の季語とはなっていないが、ドイツの風景を作りだしているものの一つであり、実は、食べることの出来るものと出来ないものがある。くり、とち、あるいはマロニエといったところか。この句は、ドイツの風土に相応しい言葉を使って季感あふれる風景を詠むことに成功した。「青き実」は、夏である。海外で俳句を詠むとき、季題、季語、季感といったところを深く再吟味することなしに安易に使用したならば、その句は、ドイツの自然と風土から遠く離れてしまう。季語を「再吟味する」ということは、日本にない、ドイツの新しい季語の発見でもあり、季語の多様性を認めることでもある。ドイツ語の俳句では、季語・17字という有季定型の約束事がない。このことが、俳句の新しい発展、多様性へ向けての発展を促すことであろう。

多様性の問題は、また、不完全性の問題でもあらうとみている。心理学者岡本栄一氏（川村学園女子大学）に教えられたものであるが、数学基礎論に20世紀最大の成果といわれるゲーデルの定理があつて、それは、不完全性定理とも呼ばれている。

不完全性定理とも呼ばれる定理であるが、Goedel はこれによって自然数論と対応のつく体系は、その公理を無矛盾にすると、その体系自体が不完全になるという奇妙なことを明らかにしたのである。すなはち、その体系に関する命題の中で真か偽かを決定できない命題が存在することになってしまうのである。さらに押し進めていけば、その体系では計算不可能であるが、他の体系では計算可能となる命題がその体系の中に存在することになる。^⑬

数学基礎論の、この不完全性定理を言語の領域に適用する。自然言語、それに加えて各種のコンピュータ言語は、多種多様に花開いているが、ここにも「不完全性定理」が適用されるとみてよいであろう。どの言語を用いても相当の情報処理が出来るが、それだけでは不十分であり、不完全であつて、別の言語を使うこととなる。

日本語の俳句が求めてきたものは、それを矛盾のないものにする、日本語俳句の体系自体が不完全になって、他の言語によって、英語やドイツ語の俳句によってそれを解決することとなる。日本語やドイツ語といった自然言語は、それを矛盾のないものにする、その体系自体が不完全になって、他のそれとは違った言語、コンピュータ言語によって、それを解決することとなる。この逆も言えるので、コンピュータ言語は、それを矛盾のないものにする、その体系自体が不完全になって、他の自然言語によって、それを解決することとなるのである。つまり、特定の言語では表現不可能な部分も他の言語では表現可能となるのである。数学の領域で成立するゲーデルの「不完全性定理」^⑭を言語一般の定理として受け入れると、それは、人間文化の多様性の必然を証明す

ることの出来る論理であろうかと思う。⑮

文学の多様性ということは、また、古き良き文学の保存とともに、時代に耐えられる新しい文学の発見であろうと思う。インターネットの俳句とは、そうした課題に耐えられるのではないか。インターネットと俳句、文学の、この新しい課題を、「現代社会における文学の運命」として捉えたい。これは文学の未来の明るい話であって、かつての偉大な文学が多くの人々に明るい励ましを与えてきたように、これからの文学もそうあって欲しい。「文学の秀ぐれたものは、なにより僕らに励ましをあたえる。」⑯と言うノーベル文学賞作家大江健三郎は、「僕は深く気が滅いてくると、医師トルストイ、ドストエフスキー、あるいはマンに救助をもとめる。」⑰と告白している。

トーマス・マンや大江 健三郎の「人間らしさ」、そして文体上のフモール、これらは「時代を超えた人間性」からくるもので、現代社会と文学を強く結びつけてくれるであろうし、文学は、現代社会のなかでの力を得ることができるであろう。それは、現代社会の危機的状況のなかでさえも失われないもので、そこには、人間の未来への救いが確かにある。「人間らしさ」といえば、ゲーテが『ファウスト』の終末近くで述べているところの

Auf freiem Grund mit freiem Volke stehn. ⑱

自由な民と共に、自由な土地の上に住みたい。（鷗外訳）

という世界にも通じるであろうし、また、ベートーベンの『第九交響曲』にも通じている。その第四楽章での合唱、シラー原作の詩“An die Freude”（歓喜に寄せて）は、“O Freunde”（おお友よ）という親愛のこもった呼び掛けで始まり、その最終連では

Brueder! Ueberm Sternzelt

Muss ein lieber Vater wohnen. ⑲

同胞よ。星々のかなたに父なる神は必ずおわします。

と神の存在を確信して繰り返し歌う。これは、地上樂園の人間らしい世界に違いない。トーマス・マンは、長編小説『ファウトゥス博士』のなかで『第九交響曲』を、

Das Gute und Edle, was man das Menschliche nennt, obwohl es gut und edel. ⑳

善であり高貴であるもの、善であり高貴だが、人間らしいものといわれるもの

と答えている。

海外での俳句、インターネット上での俳句がますます盛んになってきて、それらのなかにも「生の確認」や「人間的なもの」を求めての行為であると思われるものがあるが、それらを見逃すことがあってはならないであろう。

(マルティメディアとインターネットの諸問題については、東京大学教授西垣通氏の著書・論文に多くを教えられたことをここに付記する。)

【注】

①日本独文学会のホームページのアドレス (URL) :

<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jgg/index.html>

②岩居弘樹(立命館大学)氏のホームページのアドレス (URL) :

<http://www.ritsumeit.ac.jp/kic/~iwaih/index-g.html>

③ドイツ俳句協会のホームページのアドレス (URL) :

<http://apoll.hewa.de/haikudhg/>

④1990年のフランクフルト日独俳句大会 (Haiku-Treffen) については、Das Haiku heute und seine Kriterien. Matsuyama (Aoba) 1992. で報告されている。

⑤「いたどり」第326号、1978年、23頁。

⑥「インターネット俳句センター」のアドレス (URL) :

<http://www.shikoku.ne.jp/suien/>

⑦宮坂豊夫：ドイツ語ハイクについて・語学的解釈の試み (月刊水煙第114号、1993年、8頁)

Miyasaka, Toyoo: Zum deutschen Haiku - Erklärungsversuch unter sprachlichem Gesichtspunkt - In: Deutsche Literatur Nr. 9 (Die Germanisten-Vereinigung in Ehime) 1994, S. 19.

⑧「インターネット俳句センター」ドイツ語バージョンのアドレス (URL) :

<http://www.shikoku.ne.jp/suien/HaikuFreunde.html>

⑨Deutsche Haiku-Zeitschrift (ドイツ俳誌) のアドレス (URL) :

<http://www.gac.edu/~ludwig/dhz.html>

⑩高橋信之のホームページのアドレス (URL) :

<http://www.shikoku.ne.jp/suien/nobuyuki.html>

⑪西垣脩：風狂の先達 (角川書店) 1981年、106頁。

Mori, Takaaki: Gedicht und Haiku - Was ist Dichtung? In: Das Haiku heute und seine Kriterien. Matsuyama (Aoba) 1992. は、文学における人間性の諸問題を論

じたもので、参考資料とした。

⑫世界大俳句歳時記（角川書店） 1995年、337頁。

⑬岡本栄一：現代心理学の論理（海外出版貿易） 1997年、82頁。

⑭ゲーデルの「不完全性定理」については、Raymond M. Smullyan、高橋昌一郎訳：ゲーデルの不完全性定理（丸善）、竹田青嗣：現代思想の冒険（毎日新聞社）等も参考資料とした。

⑮文化の多様化の問題には、多言語主義の理論も必要と思われるが、多言語主義の参考として、西垣通氏のWebサイト（L/Pフォーラム）を紹介するにとどめる。

L/Pフォーラムのアドレス（URL）：

<http://lp.iss.u-tokyo.ac.jp/>

⑯大江健三郎：新しい文学のために（岩波新書） 1990年、175頁。

⑰大江健三郎：『個人的な体験』から『ピンチランナー調書』まで（新潮文庫） 1982年、415頁。

⑱Goethe, J. W. v. : Goethes Werke in 14 Bd. Hamburg (Christian Wegner) 1960, Bd. 3. S. 634.

⑲Schiller, Friedrich: Schillers Werke.

⑳Mann, Thomas: Gesammelte Werke in 12 Bd. (S. Fischer) 1960, Bd. 6. S. 634.

この論文は、成城大学経済学部の「成城大学経済研究第」142号（信岡資生名誉教授退任記念論文集）に発表されたもので、以下にその序文の一部を紹介する。

信岡先生のこと
一序にかえて一

経済学部機関紙「成城大学経済研究第」142号は、平成9年3月でもって退職された、信岡資生名誉教授の長年に亘る学恩への感謝の意を表すため、「退任記念号」として編集されたものである。

学外のドイツ語、ドイツ文学関係の先生方では、まず、先生が長年親しくおつきあいなさっている、東京大学名誉教授、元本学文芸学部教授濱川祥枝先生、愛媛大学名誉教授高橋信之先生より玉稿を賜った。また、日頃非常勤で本学部のドイツ語教育にご尽力頂き、また信岡先生を中心に行ってきた我々研究会の仲間でもある、法政大学の日中鎮朗先生、桐蔭学園横浜大学の鹿児島繁雄先生

も原稿をお寄せ下さった。

本学部では、池田浩太郎名誉教授からも御寄稿頂き、むろんまた現職の先生方の日頃の研鑽の成果を問う論文も数多く収載することができた。

このように多くの方々のご協力を得て、信岡先生に捧げるに相応しい立派な論文集ができあがったことは喜ばしい限りであり、多くの先生方のご尽力に感謝している次第である。

・・・後略・・・

平成10年10月

経済学部助教授（本論文集編集委員）

木下直也